論　文

田漢の歴史話劇における材源と創作に関する考察：『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に

楊　　韜

〔抄　録〕

本稿は、田漢の歴史話劇作品『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』や『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる田漢の創作活動を考察した。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられるが、田漢は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点から独自の創作を加えた。これは「劇本荒」のニーズ及び当時の政治的背景に応じるように創作されたと思われる。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパーンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品であるが、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いた箇所は少なく、単一の材源（史料）に依拠して創作したとは考えにくい。ただし、『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』まで、田漢が歴史話劇創作をめぐって、材源と創作の間で常に模索し続けていたのは間違いない。

キーワード　田漢、歴史話劇、『春帆楼上的対話』、『朝鮮風雲』、材源

1　はじめに

本稿では、田漢[1]の話劇作品『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に、その歴史劇作品に用いられたと思われる材源及びそれに関する田漢の創作活動について、初歩的な考察を試みる。

周知のように、十九世紀七十年代以降、中国（清朝）と冊封関係で結ばれている諸隣国に対して、欧米列強及び日本といった新興国は次第に侵略を活発させた。1883年に勃発した清仏戦争はその一連の成り行きにおける重要な転換点であった。一方、1871年に清朝と「日清修好条約」を結んだ日本は、1874年の台湾出兵、1875年の江華島事件を経て、朝鮮に対する侵略の動

きを一層強めた。1882年、ソウルで壬午の軍乱が発生し、朝鮮側の要請を受けた清朝は兵士を送り反乱軍を弾圧し、大院君を天津に拉致する一方、閔妃派を復権させた。その後の甲申政変も清朝の軍隊によって潰された。しかし、朝鮮における清朝勢力の優位は長く続かなかった。1894年に発生した朝鮮南部甲午農民戦争後の朝鮮出兵を機に、日本は清国の艦隊を奇襲し、８月に両国は宣戦布告した。その結果は日本の大勝だった。1895年３月20日、下関の春帆楼で休戦交渉が始まり、４月17日に日清講和条約（日本側では「下関条約」、中国側では「馬関条約」）の調印に至った。この日清戦争の敗戦によって、中国は朝鮮に対する宗主権を失っただけでなく、台湾などの領地の割譲や厖大な賠償金を取り決められ、深刻な危機に陥った。田漢の歴史話劇『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』は、まさに上記の歴史を題材とした作品である。（表１参照）

本稿では、まず、『春帆楼上的対話』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』との比較を行い、さらにその異同から田漢の創作痕跡を分析する。次に同じく、『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる創作痕跡を考察する。さらに、それぞれの作品における台詞にみられる特徴や登場人物の設定などについても分析する。最後に、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』という異なる時期に創作された両作品を、主題の関連性・ストーリーの構成と展開における差異・創作時期の時代背景など、複数の側面から比較し、田漢の歴史話劇の特徴に関する検討を行う。

表１　『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の概況

	『春帆楼上的対話』	『朝鮮風雲』
創作時期	1938年２月	1948年
初版情報	『最近救亡戯劇選集』（武漢・怒吼出版社、1938年４月）所収	『人民戯劇』第１巻第４号、1950年
区分	短劇（三つのシーン）	13幕
舞台設定	日本・下関（春帆楼）	朝鮮・漢城（郊外、日本公使館、景福宮、景祐宮）、中国・天津（直隷総督署）、中国・北京（紫禁城）、ベトナム・保勝（劉永福軍営）、日本・東京（黒田清隆公邸）
時代背景	光緒21（1895）年２月28日～３月21日	光緒８（1882）年～光緒11（1885）年
主要登場人物	（中国）李鴻章 （日本）伊藤博文	（中国）李鴻章、翁同龢、光緒帝、西太後、袁世凱、呉大澂、伍廷芳、劉永福 （日本）伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、井上馨、榎本武揚 （朝鮮）大院君、閔妃、金玉均

出所：『田漢全集』に基づき、筆者作成。

２　『春帆楼上的対話』における材源と創作

『春帆楼上的対話』は全部で三つのシーンしかない極めてコンパクトな短篇話劇である。登場人物も李鴻章と伊藤博文の二人だけであり、全編は李鴻章と伊藤博文の会話によって構成されている。以下、まず『中日議和紀略』との比較を通して、この作品にみられる田漢の創作痕跡を一部例として表２に示しておく。

表２　『春帆楼上的対話』にみられる田漢の創作痕跡の一部例

	『春帆楼上的対話』	『中日議和紀略』	『下関春帆楼における両雄の会見』における邦訳（参照）
例１	李：台湾多是潮州和漳、泉一帯的客民、民風非常強悍的。 伊藤：台湾還有生蕃？ 李：対哪、生蕃占十分之六、其余的都是客民。貴大臣提起台湾、想必有占拠那児的意思、因此貴国不願停戦、可是那様一来英国一定不甘心、前面説的恐怕有損別国的権利、正是這意思。守不了台湾又将怎么様呢？	李云台湾係潮州漳泉客民遷往最為強悍。 伊云台湾尚有生番。 李云生番居十之六余皆客民貴大臣提及台湾其遂有往踞之心不願停戦者因此英国将不甘心前所言恐損他国権利正指此耳。 李云不守則又如何。	台湾は潮州漳泉の客民が遷り住めるものにて最も強悍である。 台湾には未だ尚ほ生蕃ありや。 生蕃は十中の六余に居りて皆客民である、貴大臣は台湾迄も手を延ばし遂に攻め取る積りか、即ち休戦を望まれなかつたのも夫れが為めであらうが、英国は此の議に甘心しない、前に申した他国の権利を恐る云々とは正しく此の辺の事であつた。
例２	李：台湾瘴気極大、従前貴国兵在那児傷之極多、所以台湾人大概都吃鴉片煙以避瘴気。 伊藤：瞧我們日後占領台湾、一定禁鴉片。 李：台湾人抽鴉片不是一天的事。 伊藤：没有鴉片以前台湾也有居民。日本鴉片進口禁令極厳、所以没有吸煙的人。 李：佩服之至。	李云台地瘴気甚大前日兵在台傷亡甚多所以台民大概吸食鴉片煙以避瘴気。 伊云但看我日後拠台必禁鴉片。 李云台民吸煙由来久矣。 伊云鴉片未出台湾亦有居民日本鴉片進口禁令甚厳故無吸煙之人。 李云至為佩服。	台湾は其の上瘴癘の毒気多く前年も日本軍台湾に行きて傷亡した者少ないが台湾住民は大概阿片煙を喫食するが故に其の毒気を免れて居る。 御覧あれ我日本が台湾を占領せば屹度阿片を禁じて御目に懸くべし。 台湾住民の阿片を喫食するのは由来久しき事なれば之を禁ずる事は甚だ難しい。 阿片と云うものが世に出現しない以前にも台湾には住民が在つた筈、我日本の如きは阿片の輸入に就て禁令厳重である為め誰一人も喫煙する者はない。 感服の至りで御ざる。
例３	伊藤：交接之時、六月為期太久、可限一月……此約一経互換、台湾即交日本。 李：一月太快。 伊藤：一月够了。 李：頭緒紛繁、至少要両月、才可辦妥。台湾已経是貴国口中之物了、何必那様緊急。	李云一月之限過促総署與我遠隔台湾不能深知情形最好中国派台湾巡撫與日本大員即在台湾議明交接章程其時換約後両国和好何事不可互商。 伊云一月足矣。	一箇月の期限は余りに急である、総理衙門も拙者も台湾とは遠隔の所に在るを以つて深く其の情形を知る能はざれば、最も好きは中国は台湾巡撫を派遣して、日本の大官と與に台湾に於て受渡しの章程を議するにあり、其の時は条約批准交換後にて両国和好の事なれば

	伊藤：還没下咽、餓得很。 李：両万万賠款也可以療飢了。	李云頭緒紛繁両月方寛辦事較妥貴国何必急急台湾已是口中之物。 伊云尚未下咽餓甚。 李云両万万足可療飢換約後尚須請旨派員一月之期甚促。	互いに商議するに差間へなかるべし。左様するには一箇月間あれば充分である。 種々混雑の折柄なれば二箇月は猶予して緩々万事を処置しても好き筈なるに、貴国は何故左様に火急にせらるのか、台湾は既に口中の物では御ざらぬか。 併し未だ咽から下らず、餓に堪へぬ。 貳億万両もあれば餓を凌ぐに充分であらう、交換の後尚ほ我皇帝の旨をも請ふて官吏を派することなれば一箇月の期限は余りに急である。

出所：『春帆楼上的対話』・『中日議和紀略』・『下関春帆楼における両雄の会見』に基づき、筆者作成。

表２から分かるように、『春帆楼上的対話』における李鴻章と伊藤博文の会話は、『中日議和紀略』に記述したものとほとんど同じである。一部の箇所において、より口語文体に近い表現への改変が見られる。郭沫若は1943年に「歴史・史劇・現実」と題する論文を発表し、そのなかで「史劇用語は多少制限があり……根幹となるのは現代語、そうでなければ話劇とは成立しない」(2)と指摘し、歴史話劇における現代語（口語文体）の使用を推奨している。この点に関しては、田漢も同じような姿勢で実践している。次に、登場人物の表情や仕草に関する描写をピックアップして、表３に示しておく。

表３　登場人物の表情や仕草に関する描写

李鴻章	伊藤博文
苦笑（苦笑い）	帯幽黙的奸笑（ユーモラスで陰険に笑う）
吃惊（驚く）	譏弄地（人をばかにするように）
生気（怒る）	有些不耐（面倒くさそうな表情）
興奮地（興奮して）	凶狠地（恐ろしい）
気憤（憤慨する）	冷酷地（冷酷な）
強硬（強硬に）	得意（満足するように）
	咄咄逼人（気迫に満ちて人に迫る）
	急道歉（急に謝る）
	変色（顔色を変える）
	畴躇満志地（得意満面）

出所：『春帆楼上的対話』に基づき、筆者作成。

表３では、『春帆楼上的対話』台本にあった登場人物の表情や仕草に関する描写を比較しているが、分量的には伊藤博文に関するものがやや多いことがわかる。田漢は、二人の登場人物を意図的に区分して描写しているように思われる。李鴻章に関しては、交渉中の伊藤博文に対する憤慨や不満を中心に表現している。一方、伊藤博文に関しては、その冷酷さや得意満面の様子を中心に表現している。つまり、清朝と日本の外交交渉だが、その交渉に用いた言説から当事者の両国の立場を「戦勝国-敗戦国」或いは「上-下」に分けるように見立てている。李鴻章という歴史人物（外交家）に関しては、中国では一般的に「弱腰」とのレッテルが貼られているが、田漢はどのように看ているだろう。李鴻章について、田漢は次のように評したことがある。

> 李鴻章は当然当時腐敗した清朝朝廷の代表的な大官僚である。しかし、彼は対日政策について全く見解をもっていないわけでもない。琉球―台湾事件や清仏戦争以降、李鴻章は欧州と日本からの圧力には相当警戒しているし、奮起してつとめ励むことを考えた。彼らは工場や鉱山を開き、近代式の海軍を建設し始め、人材を育成し、軍艦や大砲を購入し、軍港を建築し、一定規模の成果を生み出した。（中略）光緒20年に戦争が勃発し、中国海軍は七千トン級の世界第二水準の艦隊を持っているが、他はすべてにおいて日本より後れている。李鴻章は当時の現状を把握しているため、対日作戦を主張せず（欧米）帝国主義の干渉に頼って平和の局面を保ちたかった(3)。

以上の評論からわかるように、田漢は李鴻章に対して完全否定の態度を取っていない。李鴻章の外交活動にある政治的歴史背景を踏まえて考えなければならないと主張している。田漢のこのような態度は、彼の創作にも影響していると考える。

次に、『春帆楼上的対話』台本から劇上演時のナレーションと思われる台詞をピックアップしてみたい。

> ○注意、台湾既属中国領土、生蕃殺死外人、何至与中国無渉、這一句話、就断送了台湾！（気を付けろ、台湾が中国領なら、生蕃が外人を殺した場合、中国と関係ないわけがない。この一言で台湾を失ってしまった！）
>
> ○李鴻章是書呆子、不知敵人的目的原在永不讓中国壮大起来！（李鴻章は役に立たない読書人に過ぎず、敵の本来の目的が中国を永遠に強くさせないことであるのかさえ分からない。）
>
> ○這老外交家説出笨話来了（老外交家はこのような間抜けなことを言い出した。）

○瞧今日日軍所到之処不僅公然販売鴉片且引誘我民衆吸食白面紅丸、這侵略者愈趨下流了！（今日日本軍のいる所では公然と鴉片を販売するだけでなく、我々の民衆を誘惑し毒薬を飲ませている。侵略者はますます卑しくなった！）

○不談台湾了、只談賠款数目（台湾はもうさて置き、賠償金額だけ話そう）

○他拿出一紙文件（彼は一枚の文書を取り出した）

○何等傷心事以談笑出之！（このような悲しくて悔しいことなのに、笑って片づけるなんて、よくもできたもんだ！）

○台湾、我祖宗開辟的這一南海的天地、就這様断送在這餓狼口里四十三年了！直到今日才受了我空軍的訪問。（台湾、我々の祖先が開拓した南海の天地を、このように凶悪な日本狼に飲み込まれた。43年が経った今日、ようやく我が国の空軍が訪れた。）

以上の台詞は、観衆に向けたナレーションだと推測する。このようなナレーションを導入して、ストーリーの展開を分かりやすくする効果があると同時に、李・伊藤交渉によって台湾が日本に割譲された事実が強調され、日本に対する憎悪感を高揚させる意図が見られる。

『春帆楼上的対話』は台湾の割譲という単一のテーマを作品全体に行き渡るように構成し、展開している。『中日議和紀略』の一部をほとんどそのまま用いているが、『中日議和紀略』のなかで述べられている内容の一部にしか過ぎない。ここには、おそらく田漢の意図があっただろう。すなわち、台湾割譲を作品の唯一のテーマにすることによって、隙のないストーリーとなり、焦点をあてる効果がある。また、登場人物も李鴻章と伊藤博文の二人のみにすることで、それぞれの人物像の差異をより鮮明に描き出すことを実現している。観衆にとっても、このような処理を通して、物語における登場人物たちの衝突する一瞬（複数回）がよりインパクトを与えられることになる。

３　『朝鮮風雲』における材源と創作

次に、『朝鮮風雲』について具体的に見てみたい。『春帆楼上的対話』と異なり、『朝鮮風雲』は13幕の長編劇作品となっている。劇中の舞台は漢城・北京・天津・東京など複数に散在しており、登場人物も朝鮮の王族や一般庶民から中国と日本の皇室や重臣まで、合計20人以上に上る。この作品の内容が豊富かつ紙幅（文章の長さ）が大きいから、単一の材源のみ使用したとは考えにくい。ここでは、主に『清光緒朝中日交渉史料』との比較を通して、この作品の第九

幕にみられる田漢の創作痕跡を一部例として表４に示しておく。

表４　『朝鮮風雲』（第九幕）にみられる田漢の創作痕跡の一例

『朝鮮風雲』（第九幕）	『清光緒朝中日交渉史料』
李鴻章：這次朝鮮事件可以説彼此都有不是。倘使説敵国帯兵官得処罰、那么貴国竹添公使的過失又該怎么辦呢？ 伊藤博文：竹添進宮是奉了朝鮮国王手諭、不能説他不対。貴国駐防軍開槍射撃敵国的官兵、不能不辦。 李鴻章：中国的駐防軍系朝鮮大臣的請托才入宮保護国王、并没有同貴国官兵開槍的意思。不料開到宮門貴国兵和朝鮮乱党向我国兵開槍、我們才自衛的、也不能説不対。 伊藤博文：敵国的官兵在宮里、中間隔着朝鮮兵、倘使日本兵先開槍必定先打的朝鮮兵、爾不是中国兵。 呉大澂：中国兵的前面既是朝鮮兵、又怎么能打到日本兵？拠本大臣調査、当時把守宮門的朝鮮兵是貴国人訓練的前後営、所以金玉均引他們入宮作政変的主力、敵国人訓練的左右営和江華営都是在宮外、開槍射撃敵国兵的朝鮮兵実際跟貴国兵是一気的。	李：若要懲処中国営官、竹添之錯当如何辦理？ 伊藤：竹添入宮、実奉朝王之諭、不能責其不合。中国営兵不応打我官兵、所以要辦営官之咎。 李：中国営勇并未打日本之兵。 伊藤：我兵在内、華兵在外、中間又有朝兵、我兵若先開槍、必打朝兵、是以并非兵先開槍也。 呉：華兵之前既有朝兵、則華兵開槍、只能打朝兵、如何能打到日兵？ 李：如有意打日兵、何必先行致信？既有此信、則中国営官決非有心開戦。 伊藤：中国営兵傷我民人之事、作何辦理？ 李：前日所見口供内、語多影響、傷害之人大半得自伝聞、并無実在証拠、何能定案？

出所：『朝鮮風雲』・『清光緒朝中日交渉史料』に基づき、筆者作成。

『春帆楼上的対話』と違い、『朝鮮風雲』のほうは、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いることは少ない。比較してみると、重要な事実や発言を『清光緒朝中日交渉史料』と一致するようにしているが、事象の時間的・空間的描写が異なる箇所も少なくない。田漢は複雑な歴史事実を個々に把握したうえ、彼なりに再構成して、劇に相応しい編成にしている。また、登場人物の登場する順番も、『清光緒朝中日交渉史料』と異なる箇所がある。ちなみに、上記表４に示された内容（竹添公使の朝鮮王宮進入前後の詳細）について、日本の外務省が編纂した『日本外交文書』にもみられるが、同じく歴史史料として多くの研究者に利用されている『清光緒朝中日交渉史料』と比較しても両者が完全に一致しているわけではない。もう一つ違う点として挙げられるのは、既述したように、『春帆楼上的対話』には登場人物の表情や仕草に関する描写があるのに対して、『朝鮮風雲』にはそのような描写がほとんど見られない。また、観衆向けに説明するようなナレーションもない。ただ、『朝鮮風雲』において、幕と幕の間に、年代の跳躍が激しく、実際に上演するとき、果たして観衆にとって理解しやすいものだったのか、いささか疑問を感じざるを得ない。

4　材源と創作の間における模索（『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を比較して）

1960年10月18日、中国戯劇家協会の主催で「『甲午海戦』座談会」という話劇関係者を中心とする文芸イベントが開かれた。この座談会において、田漢は「談話劇『甲午海戦』」と題した発言を行った。そのなかで、田漢は次のように述べている。

> 私は昔からこの題材（甲午海戦）を扱う計画があった。黄海での戦いだけでなく、政治・軍事・外交などの諸側面にかかわることを書こうと考えた。舞台も朝鮮から北京・天津・黄海・平壌・長崎・台湾まで多くの地域を含める。しかし、歴史に関する考えが成熟してなかったため、今日に至るまで書けなかった(4)。

田漢は以前から近代朝鮮半島をめぐる作品を三部曲で創作する予定があったが、実際に今日に確認できるのは『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』のみである。この二作品は田漢が二段階にわけて創ったものとして看做すことができる一方、三部曲という大きな計画は完成できないままその劇作家としての生涯を終えたともいえる。また、『春帆楼上的対話』はのちに『朝鮮風雲』のような長編作品を創作するための試作とも見て取れる。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられる。田漢の創作は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点にあった。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパーンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品である。ストーリーのスケール、登場人物の多さ、複数舞台に渡る移動性などから考えると、「大作」として評されてもおかしくないように思われる。しかし、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』のいずれも、田漢によって創作されたほかの作品に埋もれたように、これまでにほとんど言及もされず、関連する評価もまったく見られなかった。

次に、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の両作品の創作時期の時代背景についても簡単に触れたい。『春帆楼上的対話』は極めて短い作品であり、田漢の劇作家としての能力や意欲から考えると不思議にも思える。それは、その創作時期と関連していたのではないかと思う。すなわち、1938年前後は、「劇本荒」と呼ばれたように、中国の話劇界において、著しく作品（台本）不足の現象が現れた。それに対応するように、登場人物が少なくかつ台詞が短い、といった上演までの準備期間が短縮できる「独幕劇（一幕劇）」作品が量産された。さらに1938年は、日本軍の侵略拡大によって南京・武漢・広州などが次々と陥落させられ、中国が「亡国」という最大の危機に瀕した時期でもあった。このままだと国土を失ってしまう、といった危機感が中国民衆のなかで広がる一方、国民党内で対日妥協を主張する汪兆銘一派の動きも徐々に顕著となった。『春帆楼上的対話』は、このような背景に、抗戦における短い話劇のニーズに応じるように創作されたと思う。対して、1948年に創作した『朝鮮風雲』は日中戦争が

終結したあとの国共内戦期に創作された作品である。陳瘦竹はかつて田漢の劇作品を論じた際、『朝鮮風雲』の創作動機として、1950年代初頭のアメリカによる朝鮮侵攻及び台湾海峡への米軍第七艦隊の派遣といった時代背景に応じることだったと論じている[(5)]。しかし、このような指摘に関しては、筆者は疑問を抱く。なぜなら、『田漢全集』では『朝鮮風雲』の創作時期を1948年と明記しており、なんらかの事情によって1950年になってから『人民戯劇』第１巻第４号に掲載されたことを配慮しても、田漢の創作動機を1950年代初期の朝鮮戦争と直接に結びつくことの説得力は低い。記述したように、1960年10月18日の座談会における田漢自身の発言からも、彼はもっと早い時期から、すでにこのテーマ（朝鮮半島関連題材）の作品を創る考えがあったことがわかる。したがって、『朝鮮風雲』は三部曲という大きな創作計画のもと、長年にわたる材源（史料）の積み重ねによってはじめて実現したものだと思われる。『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』までの十年に渡る資料の収集、ストーリーの構成、執筆による完成は、田漢の歴史話劇創作という遠征の道のりであり、材源と創作の間に長く続いた模索とも言える。

最後に、田漢の教育歴（日本留学期を含む）、劇作家としての活動経歴、関連書物の出版年代などを鑑み、田漢の歴史話劇作品の創作活動において、参照した可能性のある材源（史料）を抽出し、下記の一覧表（表５）を作成して提示することにしておく。

表５　田漢が参照した可能性のある材源（史料）

中国語によるもの	日本語によるもの	1960年10月18日田漢が言及したもの
○李鴻章編『中日議和紀略』 ○蔡爾康輯『中東戦紀本末』 ○洪興全『説倭伝』（後に『中東大戦演義』と改名） ○故宮博物院編『清光緒朝中日交渉史料』 ○黄海安『劉永福歴史草』 ○翁同龢『翁文恭公日記』 ○袁世凱等『袁世凱等致李鴻藻稟牘』 ○陳裕菁輯『朝鮮壬午甲申事件之文件』 ○陳信徳訳『東郷平八郎撃沈高陞号日記』 ○著者不詳『金玉均甲申日記』 ○張雁深・張綠子合訳『朝鮮京城事変始末書』 ○張雁深・張綠子合訳『井上特派全権大使復命書』 ○張雁深・張綠子合訳『伊藤特派全権大使復命書』 ○王炳耀輯『甲午中日戦輯』	○伊藤博文『秘書類纂』 ○陸奥宗光『蹇蹇録』 ○大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』 ○外務省編纂『日本外交文書』 ○小笠原長生『東郷平八郎伝』 ○徳富蘆花『不如帰』	○『清史稿・列伝二百四十七』 ○日本人による『東郷平八郎伝』 ○林紓訳『不如帰』

出所：筆者作成。

5　結びに

以上、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』や『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる田漢の創作活動を考察した。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられるが、田漢は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点から独自の創作を加えた。これは「劇本荒」のニーズ及び当時の政治的背景に応じるように創作されたと思われる。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパーンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品であるが、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いた箇所は少なく、単一の材源（史料）に依拠して創作したとは考えにくい。ただし、『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』まで、田漢が歴史話劇創作をめぐって、材源と創作の間で常に模索し続けていたのは間違いない。

1960年末、呉晗が発表した「歴史劇を語る」を契機に歴史劇論争が起きた。既述した1960年10月の「『甲午海戦』座談会」はこの歴史劇論争において特に重要視すべきものである。瀬戸宏が「この歴史劇論争は、直接には一九五〇年代後半以後盛んになってきた歴史劇の創作をどう考えるかをめぐる論争である。しかし、その背景には狭隘な政治的実用主義から学術・芸術の自律性を守ろうとする無意識の衝動があったと考えるべき」(6)と指摘しているのも傾聴に値する。1950年代以降田漢は『関漢卿』や『文成公主』といった歴史話劇作品を創作した。『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』までの10年と『関漢卿』や『文成公主』を相次いで創作した1950年から1960年代半ばまでの時期との比較も視野に入れ、より具体的に検討するべきであろう。今後の課題としたい。

〔注〕

(1)　田漢（1898～1968）は、近代中国の著名な劇作家・詩人・映画人である。湖南省長沙に生まれ、長沙師範学校を経て1916年日本に留学、東京高等師範学校で学んだ。帰国後、『南国半月刊』を創刊、のちに南国電影劇社・南国芸術学院を開設し、文芸教育活動の傍ら多くの話劇作品や映画シナリオを執筆した。中華人民共和国建国後、国務院文化部戯曲改進局長や中国戯劇家協会主席などを歴任した。

(2)　『戯劇月報』1943年第１巻第４期。

(3)　『田漢全集』第16巻、473頁。

(4)　『田漢全集』第16巻、476頁。

(5)　陳瘦竹（1979）、63頁及び162頁。

(6)　瀬戸宏（2018）、176頁。

〔文献一覧〕

〈日本語（五十音順）〉

小笠原長生『東郷平八郎伝』（改造社、1931）

海野福寿『韓国併合』（岩波書店、1995）

海野福寿編集・解説『韓国併合：外交史料』（不二出版、2003）
鹿島守之助『日清戦争と三国干渉』（鹿島研究所出版会、1970）
外務省編纂『日本外交文書　明治　第十八巻』（巖南堂書店、1950）
瀬戸宏『中国の現代演劇：中国話劇史概況』（東方書店、2018）
竹村則行編著『説倭伝』（花書院、2000）
竹村則行「清末小説『説倭伝』に全文転載された李鴻章編『中日議和紀略』をめぐって」竹村則行編著『説倭伝』（花書院、2000）：247-267
大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』（1926～1930）
徳富蘆花『不入帰』（民友社、1903）
森山茂徳『日韓併合』（吉川弘文館、1992）
李鴻章編纂・大園市藏編訳『下関春帆楼における両雄の会見』（明治史蹟研究会、1925）
陸奥宗光『蹇蹇録』（岩波書店、1933）

〈中国語（ピンインローマ字順）〉
蔡爾康輯「中東戦紀本末」楊家駱主編『中日戦争文献彙編　第五冊』（鼎文書局、1973）
陳瘦竹『現代劇作家散論』（江蘇人民出版社、1979）
郭沫若「歴史・史劇・現実」『戯劇月報』1943年第１巻第４期
故宮博物院編「清光緒朝中日交渉史料（選録）」楊家駱主編『中日戦争文献彙編　第一冊』（鼎文書局、1973）
田漢『田漢全集　第四巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集　第六巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集　第十六巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集　第二十巻』（花山文芸出版社、2000）
王炳耀輯「甲午中日戦輯」沈雲龍主編『近代中国史料叢刊　第一輯』（文海出版社、1966）
李鴻章編「中日議和紀略」中国野史集成・続編編委会・四川大学図書館編『中国野史集成続編　29』（巴蜀書社、2000）
『戯劇報』編集部編『歴史劇論集　第一集』（上海文芸出版社、1962）

〔付記〕
本稿は、科学研究費【基盤研究（B）『中国建国前夜のプロパガンダ・メディア表象』（研究代表者：星野幸代）】の研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

（よう　とう　中国学科）

2018年11月15日受理